

# 井月さんはなぜふるさとを捨てたのか

我道の神とも拝め翁の日

★翁の日―芭蕉翁の命日

井月さんは、ふるさと長岡をなぜ離れたのか、これも謎の一つです。

その頃の長岡藩は、天皇をかついで新しい世を実現しようとする勤王派と、今の徳川幕府の政治を守ろうとする佐幕派との二つに分かれて揺れていました。十八歳のころの井月さんは血気盛んで、一説では言い争って友をあやめたことが原因でやむなく江戸へ出たと言われます。

若い頃の井月さんは、藩校での成績もよく出世を夢見て懸命に努力しました。それが俳句の道を知り、芭蕉を学び、あこがれの芭蕉の俳諧紀行文「奥の細道」の旅をたどって全国各地を放浪するよ



うになると、留とどまることのない無常むじょうこそこの世の常と、心に深く刻みこんだのではないでしょうか。一切いっさいの富を願わず、出世を夢見ない一人の俳人として生きる決意が生まれてきたのです。

次のような井月さんの句があります。

浮雲あぶなげ気な富は願はず紙衾かみぶすま

冬の寒さは粗末そまつな紙の夜具でしのげばよい、道をやまってしまうような富を求めるだけの人生は願うまいという決意が感じられます。

井月さんは、ふるさとを捨て旅に生きることにしたのです。

## 井月さんの生き方

朝顔の命は其日其日かな

朝顔は、朝開花し、昼にしぼむ。花の命はその日その日だなあと、井月さんの人生観を示しているような句です。

伊那には井月さんのいくつものエピソードが伝えられています。それを知ると井月さんの生き方、考え方が浮かび上がってきます。

井月さんは、お礼でも、感謝でも、挨拶あいさつする時や酒を飲んだ時でも、いつも「千両せんりょう、千両せんりょう」の言葉で済ませていました。

ある日井月さんが高遠いちのダルマ市へ行くというの

で、皆は、「一文いちもんもなくて市へ行くのは…」といって笑ったら、即座そくざに「一文の銭ぜにがなくても千両と人わいはれて心せい月」と応えました。



また、ある時井月さんが来て、落ちてる柿かきの葉を拾い、しきりに着物でさすってほこりを落としていく。何をするかと見ていたら、やがて家に入って奥さんの前へそれを出して、「ハイお土産みやげ」。ふきのとうを差し出すこともありました。

羽二重はふたえのたもと土産みやげや落の臺ふきのとう



ある年の冬のこと、井月さんの着ているものがあまりに薄くて寒そうであるからというので、おばあさんが綿入れ羽織を着せてやりました。三日ばかりして井月さんに出会ったが、着せてやったはずの羽織を着ていません。不思議に思ってしまったのかと聞いてみると、乞食あはしがあまり寒そうに見えたからくれてやったそうで、おばあさんもほとほとあきれていました。

五、六人の子どもらが小学校の帰り道に、たまたま井月さんの「トボトボ」と歩く後姿を見つけたので、その腰こしにぶら下げているヒョウタンを石でぶつけて破ることに相談いっけんしました。そこで大小、手ごろの石を盛んにほうったがなかなかうまく当たりません。悪太郎あくたろうの面々も少し焦あせり気味で一層盛んに投げているうちに、誰だれの石が当たったか後頭部から血が流れ出しました。それでも、井月さんは振り向きもせず歩調も変わらなかつたのです。

「あの人に限って、いつも顔色を変えたことがな

い。ああいうのが聖人というのでしょ」と、おばあさんは言いました。井月さんは不思議な人です。

